

## 世界の豊穡性

### ——アリストテレスのデュナミス概念の可能性<sup>1</sup>

中畑 正志

20世紀の終わりごろから、形而上学の議論の場で、ネオアリストテリアンと呼ばれる人びとが活躍している。この論者たちは、本質 (essence) や傾向性 (disposition)、潜在性 (potentiality)、力 (power) などを事物・事象の実際の (actual) あり方として認める<sup>2</sup>。そして、一方でこれらの概念および形而上学的な可能性や必然性に対するクワイン流の懐疑主義と決別するとともに、他方で D. ルイスのように可能世界論に依拠するのではなく、実際の世界のあり方にもとづいて実在する様相性を説明しようとする<sup>3</sup>。

この論者たちの議論には、大まかに言えば、二つの論点がある。一つは、本質 (essence) をめぐるもので、ある事物 X の本質を X が必然的にもつ (可能世界論で言えば X が存在する可能世界のすべてにおいて認められる) 特性と考えるのではなく、むしろ形而上学的必然性を本質にもとづいて説明する<sup>4</sup>。もう一つは、傾向性や潜在性を事物の基本的なあり方として認め、それらを従来のように反事実的条件によって (さらにはそれを可能世界論に訴えて) 説明するのではなく、実在する潜在性ないし傾向性によって形而上学的可能性を説明する<sup>5</sup>。このように、この二つの立場は、様相的特性についてその実在性を認め、それを現実の世界の事物・事象のあり方にもとづいて説明する点では共通する。ただし、その理論的關係がどのようなものか——競合するのか、相補的なのか、あるいは一方が他方の根拠となるのか、など——は、それ自体が考察に値する問題と言える<sup>6</sup>。

では、この論者たちがそれぞれ歴史的源泉として認めるアリストテレスにおいては、事情はどうだったのか。これが、私が本来考えたい話題である。以上の現代的議論を念頭に

<sup>1</sup> 本稿の成り立ちについては「後記」を参照。

<sup>2</sup> この立場の多くの論者と同様に、この報告では disposition, potentiality, power についてとくに区別せずに言及する。

<sup>3</sup> このような論者たちの主張と、その陣営内の次に述べる二つの立場については、少し古い Vetter 2011 がわかりやすい。

<sup>4</sup> 直観的に説明すれば、p が形而上学的に必然であるのは、あるものが p を真とするような本質をもっていることにもとづいているという考え方である。この意味での本質主義については、古典的には Fine 1994 と Fine 2005 に収録された論考を、近年の動向は Bovey 2021 などを参照。

<sup>5</sup> 直観的に説明すれば、p が可能であるのは、その発現が p を真とするような power あるいは disposition あるいは potentiality が存在することにもとづいているという考え方である。Martin 1994, Vetter 2015 などを参照。

<sup>6</sup> Vetter 2021 にそうした考察が展開されている。

おきつつアリストテレスを読むことは、彼の「形而上学」的思考の理解のためにも、いま紹介した様相にかかわる形而上学的議論にとっても、有意義であると考えからである。

俯瞰的にみたととき、アリストテレスの世界像において、本質という「ある」のかたちがその根本にあるのは間違いない。『形而上学』において最も基本的な存在としてその「何であるか」が追求されるウーシアーが本質 (*τὸ τί ἦν εἶναι*) と同定されているからである<sup>7</sup>。

しかし他方で、アリストテレスは、いくつかの箇所、それぞれのものがそのエルゴンとデュナミスによって規定されるという旨の主張をしている (*Pol.* I 2. 1253a22-23; *Meteor.* 4.12. 390a10-20; *GA* I. 2 716a18-27)。もしもデュナミスがそれぞれの事物や事象の「何であるか」の規定に直接にかかわるなら、それもまた、アリストテレスの世界観において最も基本となるあり方となるであろう。こうした考察に従えば、アリストテレスは傾向性や力を基本とする存在論と親近的であり、むしろその一翼を担っていることになる<sup>8</sup>。

ただし、アリストテレスには、デュナミスがそのオントロジー（「ある」の理論）において基礎的であることを疑わせるいくつかの主張がある。まず、ウーシアーがエネルギーとして理解されていることだ<sup>9</sup>。デュナミスは、エネルギーと対比されるがゆえに、ウーシアーとも何らかの意味で対比されるとすれば、最も基礎的な存在とは言えないのではないか。また、『形而上学』Θ巻第八章では、エネルギーがデュナミスよりも、説明規定（ロゴス）においても、ウーシアーと形相においても、そしてある意味では時間と生成においてさえ、「より先」であることが論証されている。このことは世界のあり方の最も基本にデュナミスを位置づけることを困難にするようにもみえる<sup>10</sup>。

<sup>7</sup> *Met.* Z17. 1041a27-33（この箇所の理解については Burnyeat に従う）；b5-6；H1. 1042a17. なお Z4-7 でのウーシアーと本質との関係、とりわけ 1031b2-3 *εἰ τὸ τί ἦν εἶναι οὐσία ἐστίν*；1031b31 *εἴπερ οὐσία τὸ τί ἦν εἶναι* の条件節の意味については別途論じる用意がある。

<sup>8</sup> たとえば Marmodoro (2009; 2014; 2017; 2018) は power 一元論とも呼べる世界像をアリストテレスに帰した上でそれをさらに展開している。

<sup>9</sup> *Met.* Θ9. 1050b2-3 「したがって、ウーシアーと形相がエネルギーであることは明らかである」。また *Met.* H3.1 043a35-6 「魂は特定の身体のウーシアーでありエネルギーだからである、という表明は、*De an.* II 1. 412 a19-21 での、魂が形相としてのウーシアーであり、そのウーシアーはエンテレケイアであるという主張とも照応する。

他方で、Bonitz 764 b28-31 は *τὸ τί ἦν εἶναι* の項で次のように本質とエネルギーの同義性を語っている。inde synonyma τὸ τί ἦν εἶναι sunt ἐνέργεια: (1) τὸ γὰρ τί ἦν εἶναι τῷ εἶδει καὶ τῇ ἐνέργειᾳ ὑπάρχει. *Met.* H3. 1043b1 (2) et ἐντελέχεια *De an.* II.1. 412a27, b5, 9, 11, (3) *Met.* Λ8. 1074a35. (著作名表記方法の変更と括弧付き数字の付加は私)。しかしアリストテレスは単純に両者を同一視してはいない。そもそも本質とエネルギーの概念が、アリストテレスのひとまとまりの議論のなかに同時に登場することは多くない（デュナミスとエネルギーが主題的に分析されるΘ巻では *τὸ τί ἦν εἶναι* への言及はない）。Bonitz が枚挙する箇所についても、ざっと見ただけでも、(1)は同一視ではなく、本質がエネルギーにヒュパルケインする、すなわちエネルギーには本質が述定されることを告げており、(2)でも直接の同一視はおこなわれていない（「本質」が登場するのは挙げられている箇所のなかで b11 だけであり、そこで「本質」と同一視されるのは、エネルギーないしエンテレケイアではなく魂の規定である *οὐσία ... ἢ κατὰ τὸν λόγον* である）。(3)でエンテレケイアだと主張されている本質は、「第一の本質」と限定が付されて実質的には不動の動者が想定されているので、全般的な同一視ではない。

<sup>10</sup> Marmodoro は、少なくとも註8に挙げた文献では、デュナミスに対するエネルギーの先行性というアリストテレスの主張に言及せず、沈黙している。

本稿での考察は、しかし、以上のような本質とエネルギーとの関係という問題を展望しつつも、次の範囲にとどまる。まず、『形而上学』Θ巻第六章におけるエネルギーとデュナミスの対比についての議論を検討することによって、デュナミスの「現実性」を確認し、さらに同巻第八章でのエネルギーの先行性の主張の検討を通じて、エネルギーの意味とデュナミスとエネルギーの関係について（おそらくこれまで十分に検討されてこなかったと思われる）考え方を示唆する。

## I デュナミスの現実性

### §1 エネルギーにおいてある／デュナミスにおいてある

デュナミスとエネルギーそれ自体についての解明は、つぎのような仕方で行われる。

T1 (1)そこで、次のことが確認できる。エネルギーは、われわれがデュナミスにおいて成立していると語るのではないような仕方でも事物・事象 (*τὸ πράγμα*) が成立していることである。(2)他方、われわれが「デュナミスにおいて成立している」と語る例を挙げるなら、木材のなかにヘルメスが、線分全体のなかにその半分が成立している、と語る場合である（それを切り出すことができるであろうから）。(3)そして、考究してはいない人でも、考究することができるのであれば、知ある者、とわれわれは語る。これに対してもう一方の場合は、エネルギーにおいてあるものである。

(4)さて、われわれの言わんとするところは、それぞれ個々の事例についての帰納によって明らかに示される。また、すべてのものについて定義を求めるべきではなく、むしろ類比関係にもとづいて<sup>11</sup>観取すべき場合もある。すなわち、(5) (i) (a) 建築するものが [1048b.1] (b) 建築をなしうるものに対するように、(ii) また目覚めているものが眠っているものに対して、(iii) 見ているものが視覚を有しながら目を閉じているものに対して、(iv) 素材から切り離されたものが素材に対して、そして (v) 成し遂げられたものがまだ成し遂げられていないものに対して有する関係である。(6) こうした対比のうちで、エネルギーはこの対比の一方の部分によって区別され規定されるが、「できる」もの [デュナミスにおいてあるもの] はもう一方の部分によってそうされるとしよう。(7) だが、すべてが同じ仕方でもエネルギーにおいてあるというわけではなく、ただ類比関係によってのみそうなのである。A が B のうちにある、あるいは A が B に対してあるという関係は、C が D のうちにある、あるいは C が D に対してあるという関係と同じである、というように。(8) というのも、その関係は、ある場合には、運動変化がデュナミスに対する関係であり、またある場合にはウーシアーが素材に対する関係である。(Θ6. 1048a31-b9)

<sup>11</sup> 1048a37 *τὸ ἀνάλογον* ではなく *τῷ ἀνάλογον* (a) を Jaeger とともに読む。

この議論は、多くのメッセージを含んでいる。まず、(1)は、デュナミスとエネルゲイアを「デュナミスにおいてある」、「エネルゲイアにおいてある」という対比のもとで説明すること、そして両者はともにある特定の事象 ( $\tau\acute{o}$   $\pi\rho\acute{\alpha}\gamma\mu\alpha$ ) にかかわる二つのあり方であることを告げている。いまある事象を  $\phi$  とすれば、その対比は「デュナミスにおいて  $\phi$ 」( $\phi$  DO と略記)「エネルゲイアにおいて  $\phi$ 」( $\phi$  EO と略記)と表現される ( $\phi$ には「見る」のような動詞表現も「家」のような名詞表現も代入される)。

さらに、T1(1)でエネルゲイアを「デュナミスにおいてある」ことの否定を通じて規定していることは、デュナミスのほうがわれわれにとっては理解しやすいことを示唆する。そしてこのような規定の仕方は、両者が特定の事象  $\phi$  についての背反的なあり方であることを前提としていると言いうるだろう<sup>12</sup>。

## §2 類比

T1(4)はその説明の方法が類比的関係に依拠した帰納によること、つまり A と B、C と D、E と F の比が同一であることからデュナミスとエネルゲイアとの関係を「観てとる」べきことを主張する。

アリストテレスは類比関係による説明を、その著作のいくつかの箇所でおこなっているがその説明にはいくつかのタイプがある。その一つは、 $A : B = C : D$  の関係において、A と B が既知の関係であることにもとづいて未知の C と D との関係を説明する<sup>13</sup>。しかしここでの類比による説明はそれとは少し異なる性格をもっている。ここでは、A と B、C と D、E と F というそれぞれの事象間に成立する同一の比の関係から「帰納」によってそこにエネルゲイアとデュナミスという関係を観取することが求められている。

注意すべきことは、この場合に各事象を  $A : B = C : D = E : F \dots$  という類比関係に置くことは、いわば、A, C, E をエネルゲイアという観点のもとで、B, D, F をデュナミスという観点のもとで観るということを潜在的に含意していることだ。つまりここでの帰納は、まったく白紙の状態から多くの個別的事象の枚挙などを通じてある普遍的な認識を獲得することではなく、類比関係を構成する A と B、C と D のそれぞれの認識のうちにすでに潜在的に含意されている契機を顕在化して認知することである。

ただしこのことは、アリストテレスにとって、その類比によって認識されるデュナミスとエネルゲイアの身分が特定の観点や観察者に依存しているということの意味しない。帰納的に観取されるのは実在的あり方にほかならないからだ<sup>14</sup>。そして、そのように読みと

<sup>12</sup> Beere 2009: 172–3 は、(2)(3)から、「デュナミスにおいて  $\phi$  である」と「エネルゲイアにおいて  $\phi$  である」が  $\phi$  の「ある」について *exhaustive* で *incompatible* あると明確に表明している。

<sup>13</sup> たとえば *De an.* II.1. 412b1–4 の類比では (i) 口が栄養を吸収し、また根も栄養を吸収する、という同じ役割を果たす、(ii) 口は道具である、という事実認識にもとづいて、(iii) 植物の根も道具である、という認識を得る。

<sup>14</sup> ここでの「帰納」は、(i) 多数の個別的命題と普遍的命題との関係でない、(ii) 確認される

られるべく提示される事例は、無生物、人工品から神までを含み、またウーシアーと素材などの概念のもとにまとめられる事物・事象の「あり方」にまで及ぶ包括的なものである。たんに数が多いだけでなくその種類も異なる。人工物の制作と自然的身体的はたらき、前者のうちでも「エネルゲイアにおいてある」のが活動である場合と制作物である場合、そしてデュナミスが能動的である場合と受動的である場合。この多様性は、「エネルゲイアにおいてある」と「デュナミスにおいてある」の対比が包括的であり、「ある」とされる事象のほぼ全体を蔽うことを示唆している。逆にそうした多様な事象には、定義的な統一性も、「ある」とウーシアーの間に見出される焦点的統一性も求めることはできない。だからこそ、類比関係にもとづいて帰納的に観取することが必要だったのである。

では、挙げられている事例は二つの対比的なあり方の内実について何を語るのか<sup>15</sup>。(5)の諸事例のうち、アリストテレスの語り方 (*ὡς τὸ οἰκοδομοῦν πρὸς τὸ οἰκοδομικόν, καὶ κτλ.* 1048a37-b1) は (i)をいわば範例としていることを示しているので、この例に注目しよう。重要なことは、(1)について確認したように、これが同一の事象にかかわる二つのあり方の事例だという点である。その同一の事象は、(5) (i)には明示されていないが、直前の(3)から「建築知ある者」のあり方として読みとることができる。すなわち

	建築できる (建築していない)	建築知ある者 DO
(i) 建築知ある者		
	建築する／している <sup>16</sup>	建築知ある者 EO

アリストテレスの指示に従って、他の事例についても同様の仕方で理解できる。

	覚醒できる (がしていない)	覚醒する (もの) DO
(ii) 覚醒／感覚する (もの) <sup>17</sup>		
	覚醒している (感覚している)	覚醒する (もの) EO
	視覚をもつ (もの)	見る (もの) DO
(iii) 見る (もの)		
	見ている (もの)	見る (もの) EO

複数の事象からある意味で新たな事象 (エネルゲイア／デュナミス) の発見へと導いている、などの興味深い特徴をもつ。なお、アリストテレスにもとづいて、世界の可知的なあり方と心的能力を理解するならば、グルーのパラドクスに陥らないような仕方で「帰納」の問題に応答することができるかと私は考えるが、これは別の論考を要する。

<sup>15</sup> 事例についての以下の私の考察は、詳細な分析をおこなっている Beere 2009 を参考にしている。

<sup>16</sup> 「建築する／している」と二つを表記する理由については、本稿のなかで明らかになる。

<sup>17</sup> 眠りが感覚能力の特定の状態であることについては、『眠りと目覚めについて』において詳しく論じられている。感覚の主体となるのは、いわゆる第一の感覚器官である。

木材

ヘルメス像 DO

(iv)ヘルメス

素材から切り出されたもの

ヘルメス像 EO

(v)は一般化である。そして「成し遂げられる」(*ἀπειργασμένον* < *ἀπεργάζεσθαι*) という言葉は、家のような所産 (*Phys. II 8. 199a16*) にも、「見る」のような活動 (cf. *Pl. Resp. 477d1, 4<sup>18</sup>*) にも使用されるので、これまでの議論をまとめるとともに、*ἔργον* という語を含む動詞を使用することによって、続くエルゴンとエネルゲイアの議論へと導いている。

### §3 デュナミスの「現実性」

以上の類比は、次のようなことを告げるだろう。第一に、デュナミスにおいてあることもまた、掛け値なしで現実の (actual な) あり方の一つである<sup>19</sup>。「デュナミスにおいて建築知ある人」とは、通常の意味で建築家である (それゆえ「可能的に建築家」と表現するのは適切ではない)。事実、「デュナミスにおいてある」ことの例の多くは『魂について』II 1. 412b5 で「第一のエンテレケイア」と呼ばれているものに相当する。それらも、それぞれの事物の現実の積極的なあり方である。

しかし(iv)の事例はより問題的である。おそらく、木材のあり方は第一のエンテレケイアに該当しないであろうし、また「デュナミスにおいてある」を「可能である (possible) が実際には (actually) そうでない」という理解 (またそれに近い意味で potential であるという理解) へと誘導する例である。ある木材が「デュナミスにおいてヘルメス像である」と言われるなら、その木材は現実にはヘルメス像でないがそうなる可能性がある、可能的にはそうである、と容易に考えることができるからだ。しかしアリストテレスは、事例を並列することを通じて、(iv)についても、他の事例と同様の理解を求めている。すなわちヘルメス像が切り出される木材も、建築家が建築能力をもっているように、そこからヘルメス像が切り出されうるに相応しい硬さや加工しやすさを含んだある積極的なあり方をもつという意味で「デュナミスにおいてある」のである (それが受動的なデュナミスであることは、感覚や「見る」の場合と同じ)。「デュナミスにおいてある」ためには、このように一定の組織化などによってある特性を実現していなければならない。このことは、Θ7. 1048b36–1049a20 において、どのような条件の下で「デュナミスにおいて人間である」ことが認められるかという問いの考察を通じて、より明確に表明されている。

さらに、すべての事例について共通であるのは、建築家と木材、視覚対象と視覚のよう

<sup>18</sup> このあたりのプラトンによるデュナミスをめぐる議論は、明らかにアリストテレスのデュナミスとエネルゲイアの問題の背景となっている。

<sup>19</sup> 「現実的」(actual) 「現実性」(actuality) は、ともに意味を確定するのがむずかしい概念であるが、この報告では日常的な意味を基本として理解している。この点について「後記」も参照。

に、それぞれのデュナミスがそれと相関する別のデュナミスへの作用ないしはそれからの被作用によって一つの「エネルゲイアにおいてある」ことへと変換されることである。このデュナミスの共同的性格は（その含意と意義については論及できないが）、アリストテレスのデュナミスの理解における基本となる考え方である。

## II エネルゲイアの先行性

### §1 アリストテレスの主張

これまでの考察は、現代の傾向性主義 (dispositionalism) や潜在性主義 (potentialism) と親近的なアリストテレスの思考の局面を照らし出した。諸々の傾向性や潜在性が「現実にある」(actual な) ものであり、それに世界内の様相性も根拠づけられるというのがこの陣営の主張だからである。

しかし、アリストテレスの世界観の全体をそのような立場として特徴づけるのは時期尚早である。アリストテレスの議論には、デュナミスを現実世界の最も基本となるあり方として考えることを阻むようにみえるいくつかの論点が存在するからである。その一つが、すでに触れたように、Θ巻第八章で表明されている、デュナミスに対するエネルゲイアの先行性という見解である<sup>20</sup>。そこでは、エネルゲイアはデュナミスに対して、説明規定(ロゴス)(+認識)、時間(+生成)、そしてウーシアー(+形相)、のそれぞれの観点においてより先であることが論証される。

そこで論じられているデュナミスは「一般的にすべての運動変化のための始原および静止のための始原」(1049b7-8)であり、続いて「自然本性も、デュナミスと同一の〈類〉のうちにある」(1049b8)と表明されているように、『自然学』II 1. 192b20-23で提示した「自然」(φύσις)の概念に合致する。その意味でも、デュナミスはアリストテレスの自然観を支える最も基礎的概念とも言えそうである。にもかかわらず、アリストテレスはそれがエネルゲイアに対しては「より後」であることを論証し、先述した「ウーシアーないし形相はエネルゲイアである」という判定を導く論拠を準備している。紙幅の関係上、三つの先行性のうちでこの問題に直接関係する二つの議論に絞って、その先行性を検討する。

T2 (1)さて、説明規定(λόγος)においてより先であることは明らかである。なぜなら、第一の意味で「できるもの」は<sup>21</sup>、それが「(活動を) 実現する」(ἐνεργῆσαι)

<sup>20</sup> また、デュナミスと可能性 (possibility) との関係、とりわけΘ3. 1047a23-24での「可能性」(ἐνδέχασθαι)に依拠してデュナミスを規定しているようにみえる記述、およびそれに関連する議論の解釈が問題となるだろうが、ここで議論する余裕はない。

<sup>21</sup> 多くの解釈者たちは、このτὸ πρῶτως δυνατόν 1049b13-14を、Θ1. 1045b35-36で言及される「最も本来的な意味でのデュナミス」を指すと解釈するが、以下で挙げられる例には、「見られることができるもの」という受動的なデュナミスも含まれている。Beereに従い、たとえば

ことが可能である」ことによって「できる」からである。たとえば、建築することのできるものが建築しうるのであり、見ることができるものが見うるのであり、見られることのできるものが見られうるのである。同じ説明が他の場合にも妥当するので、したがって一方のものの説明規定と認識が他方のものの認識より先行して成立することは必然である。(Θ8. 1049b12-17)

T3 しかしまた、たしかにウーシアーのうえでも、エネルゲイアがより先である。その理由は、(1)第一に、生成の上ではより後のものが、形相(種)とウーシアーのうえではより先であるからである(たとえば、成人は子供より先であり、人間はスペルマより先である。なぜなら、一方はすでにその形相を有しているが、他方はそうではないからである)。(2)さらに、生成するものはすべてその始原に向かって、つまり終極(目的)へと進むが(なぜなら、始原は「そのための」のそれに当たるものであり、生成は「終極(目的)のため」だからである)。しかるに、エネルゲイアは終極(目的)であり、そしてそのことのためにデュナミスは獲得されるのである。というのも、動物たちは視覚を有するために見るのではなく、見るために視覚を有するのである。同様に、ひとびとが建築術を有するのは建築するためであり、考究的な知識を有するのは考究するためである。しかし考究的な知識を有するために考究するのではない。[中略]

さらに、(3)素材はその形相へと向かって進むであろうから、デュナミスにおいてある。他方、少なくとも、それがエネルゲイアにおいてあるのなら、そのときには形相のうちにある。それ以外のものの場合においても同様であり、その目的(終極)が運動変化であるものについても妥当する。それゆえ、教師たちは生徒が知的な活動をしているさまを自分たちが示すことができる場合にはじめてその終極(目的)を達成していると考えるように、自然もまたそれと同様にはたらくである。[中略]つまり、エルゴンが終極(目的)であり、エネルゲイアとはそのエルゴンのことである。それゆえエネルゲイアという名称もエルゴンに依拠してそう語られるのであり、そしてエンテレケイアと関係している。(Θ8. 1050a4-23)

T2 は説明規定と認識のうえでの先行性であり、T3 はウーシアーと形相のうえでの先行性であるので、前者が認識上の先行性、後者が実在的な先行性であると言ってもよい。また、二つの先行性が密接に関係することは明らかだろう。Xの「何であるか」は、説明規定によって表現されるとともにそのウーシアーや形相を表示するからである。

いくつもの論点についてさまざまな解釈や詳細な考察があるこの記述について、それら

---

建築することができるという「建築するデュナミス」のうちには、広い意味では「建築を学ぶことができる」ことも含みうるが、「第一の意味」では当の活動(建築すること)をすることができることを意味すると解する。



を参照・検討しつつ註解的にたどるような議論をおこなう余裕はない。以下では、すでに述べたように、デュナミスが実在として基礎的であるのかという問題意識のもとで、ここに主張されているエネルギーの先行性の示唆するところを検討する。

## §2 「エネルギーにおいてある」の意味

まず、以上のいずれの先行性の議論でも、「見る」「建築する」などの動詞で表わされる行為ないし出来事とその事例として言及されており、そのうえで、説明規定における先行性では「 $\phi$ できるとは $\phi$ (する)ことが可能である」という関係から、ウーシアーにおける先行性では「 $\phi$ できる（あるいは $\phi$ の知をもつ）のは $\phi$ (する)ためである」という関係から、エネルギーの先行性が導かれている。

このうち、後者はあからさまな目的論を前提とした主張であるから多くの議論があるが、前者の先行性については研究者たちからの注目も少ない。検討される三つの先行性のうち最も記述が短いというだけでなく、一見したところあまり問題がないように見えるからだろう<sup>22</sup>。それが何を $\phi$ する能力であるかを知らなければ、その能力を把握することはできない——これが主張の論点であるなら、受入やすい。しかし、ここで主張されているのは、「デュナミスにおいて $\phi$ 」ないし「 $\phi$ をできる」という認識には $\phi$ をあらかじめ認識している（たとえばその意味を理解している）必要がある、ということにとどまらない。先行するとされるのはエネルギーの説明規定ないし認識である以上、上記の下線を付した「 $\phi$ 」は、「エネルギーにおいて $\phi$ 」という意味でなければならない。

このことから、ある重要な含意を引き出すことができる。第一に、とくに $\phi$ が動詞の場合に、「エネルギーにおいて $\phi$ する」ことは、多くの場合に「現に $\phi$ している」と訳される。しかしかりにそのように訳すとしても、この先行性の議論は、「エネルギーにおいてある」ことが現在の時制や現在進行形である事態を意味する概念ではないことを示している。なぜなら、たとえば「建築することができる」つまり「建築する DO」に現われる下線部の「建築する」は、認識上の先行性が主張される「建築する EO」であるはずだが、しかし「建築することができる」「建築する DO」が意味するのは「建築していることができる」という意味ではないからである。また、ウーシアーの先行性の議論においても、建築能力に先行すべきその終極（目的）は「建築している」ことではない。この意味において、「エネルギーにおいてある」ことは、すでに見てきたようにそれ自体が現実性を表わすための概念ではない——なぜなら「デュナミスにおいてある」ことも同等に現実的

<sup>22</sup> エネルギーのそれぞれの意味での先行性について非常に詳しく議論している Beere 2009 においても、この最初の先行性についての検討は、他の先行性に比べてきわめて短く Aristotle's view about capacities seems to me to be correct. I cannot find anything further to say in its favor. But I cannot see how anyone could grasp the concept of a certain capacity without knowing what it is a capacity for. とコメントして切り上げている (p.288)。しかしアリストテレスが論証すべきことは下線部以上のことである。

であるから——ことに加えて、また現在時制的、あるいは現在進行的であることを含意しない。要するに「現実～している」ことではない。しかしもちろん、「エネルゲイアにおいて $\phi$ 」は「過去において $\phi$ 」や「未来において $\phi$ 」を表わすものでもない<sup>23</sup>。また他方で、たんなる無時間的な抽象概念でもない（建築や見ることは無時間的ではない）。

同じことはウーシアアのうえでの先行性を示す論拠に用いられる「 $\phi$ できるのは $\phi$ のためである」という命題についても妥当する。下線が付された $\phi$ は「エネルゲイアにおける $\phi$ 」を意味するのでなければならないが、それを、「現実～している」といった現実のあり方や現在進行的事態として理解することは適切でない。「建築できる」とは、「建築している」ためではなく「建築するため」のデュナミスだからである。

### §3 達成というアスペクト

では、「エネルゲイアにおいてある」とは、積極的にはどのような事態であろうか。それは「デュナミスの発現である」と言いたくなるが、デュナミスを定義項(*definiens*)とすることは、説明規定のうえでのエネルゲイアの先行性の主張に反してしまうので許されない。

「エネルゲイアにおいてある」ことを現実性や現在進行性とは別の仕方理解するうえで、Michael Thompson の考察は注目に値する<sup>24</sup>。当面の問題に関連する指摘だけに絞って紹介するなら次のようになる。一般に行為を含む出来事の記述は、*imperfective* と *perfective* という二つのアスペクトをもつ。たとえば「学校まで歩く」という行為は、過去においては、「私は学校まで歩いていた」(*I was walking to school*)と「私は学校まで歩いた」(*I walked to school, I have walked to school*)というかたちで、未来なら「私は学校まで歩いているだろう」(*I will be walking to school*)と「私は学校まで歩いてしまっているだろう」(*I will have walked to school*)というかたちで表現される。しかし現在時制には *perfective* なアスペクトがない。現在時制では、進行形で「私は学校まで歩いている」(*I am walking*)という *imperfective* なアスペクトは表現されるが、「私は学校まで歩く」(*I walk to school*)は *perfective* ではなく「私はよく(習慣的に)学校まで歩く」といったことを表わす。これに対して、状態(*state*)の記述の場合——たとえば「私は彼より背が高い」は、そのように異なるアスペクトをもたない。

<sup>23</sup> 「 $\phi$ をできる」あるいは「 $\phi$ が可能である」と「未来に $\phi$ 」との関係については別途論じる必要があるが、 $\Theta$  卷第八章のエネルゲイアの先行性の説明のなかでは、どの意味においても、先行するものが未来形では表現されていない。

<sup>24</sup> Thompson 2008 の考察は、彼自身も認めるように、全体としてもアリストテレス的視点からの考察であるが、紹介する論点は、*Met.*  $\Theta 6. 1048b18-35$  という問題の多い箇所の議論にとりわけ関係する。Thompson はアリストテレスのその議論に註で簡単に言及している(123 n.5)。Burnyeat 2008 はその箇所を論じるなかで動詞のアスペクトと時制の相違について注意を払っているが、Thompson の考察には触れていない。神崎 2016 は Thompson の仕事を紹介するなかで、Burnyeat と Thompson がともに時制とアスペクトの相違に言及していることを指摘しているが、アリストテレスの解釈に役立ててはいない。なお、本稿は、その問題箇所およびそこで論じられているエネルゲイアとキーネーシスの区別については立ち入らない。

このことを念頭において、アリストテレスの議論をふりかえってみよう。古典ギリシア語の動詞には、いわゆる「現在進行形」を表わすための動詞の特別な形態変化はない。Thompson のいう *imperfective* なアスペクトも「現在形」で表現される（典型的には『自然学』第三卷一章での運動変化を定義する議論における動詞の現在形の使用を参照）。しかし、「エネルゲイアにおいてある」と限定されるとき、それは *imperfective* なアスペクトと対比される *perfective* なアスペクトを表わすという理解は、上記の先行性をめぐる議論について一つの説得的解釈となりうる。事実、「デュナミスにおいてある」と「エネルゲイアにおいてある」についての類比関係にもとづく議論 (T1) において、後者は達成を意味する語によって総括されていた (T1 (5) (v) *τὸ ἀπειργασμένον πρὸς τὸ ἀνέργαστον* 1048b3–4)。

この解釈にもとづいたら、 $\phi$  EO は、 $\phi$  が表現する行為ないし出来事  $\phi$  の *perfective* なアスペクトを表わす。たとえば「エネルゲイアにおいて見る」とは、見るという行為が達成されていることを表わす。また  $\phi$  が特定の状態の記述である場合も、同様に、ある *perfective* なアスペクトの表現として理解することができる。たとえば、「エネルゲイアにおいて家である」とは、家の完成した状態を表わしている。

しかし、このアスペクトの区別は、あくまでエネルゲイアの問題を考えるための一つの手がかりであり、アリストテレスにより即して理解するためには、彼の議論に即して仕立て直す必要がある。まず、エネルゲイアに認められる *perfective* な性格とは、T3 (3) 「エネルゲイアはテロスである」(1050a9)、「エネルゲイアはエルゴンであり、エルゴンはテロスである」(1050a21–22) という主張が示すように、エネルゲイアが終極 (テロス) であること、その意味での達成であることに求められるだろう<sup>25</sup>。もちろん、ここでのテロスは「終了している」という意味ではなく、終極ないし目的を達成しているという意味で理解されなければならない<sup>26</sup>。 $\phi$  のデュナミスに説明規定のうえで先行するエネルゲイアとしての  $\phi$  は、たんに概念的に理解された  $\phi$  でも現在進行中の事態としての  $\phi$  でもなく、 $\phi$  の到達・達成されているあり方である。——このことは、いまはこれ以上論ずることは

<sup>25</sup> 1050a22 *ἔργον* には、さまざまな訳が与えられているが、訳書のなかでこの「達成」としての意味を表に出しているものは少なく、Bonitz, ‘Werk’; Furth, ‘work’; Tricot, Dumini & Jaulin, ‘oeuvre’, というように、「エルゴン」と同様の多義性をもつ便利な訳語か、あるいは「活動」や「はたらき」を意味する訳語が採用されている (Ross-Barnes, ‘action’; Makin, ‘functioning’; Reeve, ‘function’); しかし、それがテロスであると端的に語られていること (1050a21) は、ある終極性をもった意味で使用されていることを示唆する。続く議論において、「見る」ことのようなそのエルゴンがエネルゲイアと別個ではない場合を論じるなかで言及される *ἔργον* (1050a34) については、a22 で「活動」や「はたらき」のような意味の訳語を採用した訳者たちも含めて、「達成」のほうにむしろ近い意味の訳語を採用している (Ross-Barnes, Makin, ‘product’; cf. Reeve, ‘work’)。このことは、当該箇所でも「達成」的な意味で使用されていることを証するだろう。

<sup>26</sup> T3 で下線を引いて「終極 (目的) を達成している」と訳した 1050a18–19 *τὸ τέλος ἀποδεδωκέναι* を、Makin は ‘have provided the end’ と曖昧に訳しているが、*ἀποδεδωκέναι* は EN1106 a16 *τὸ ἔργον ... ἀποδίδωσω* などと同じ用法であり、Ross-Barnes ‘have achieved their end’ の意味で理解すべきである。この「達成している」の「している」は進行形でなく、「理解している」(I understand) に含まれるのと同様の、一つの達成した状態としての「している」である。T1 での「覚醒している」「見ている」なども同様に解釈できるだろう。

できないが、注目すべき見方を含んでいる。それは、G. Ryle がアリストテレスの議論に感知し、W. Sellars がその Ryle の指摘の重要性に注目した論点でもある<sup>27</sup>。すなわち、(たんに「見えている」とは異なり)「しかじかと見る」とは、ある達成 (achievement) を表わすということである。これは知覚的な現われが、真正の感覚知覚か、それともたんに見えているだけかのいずれかであるという選言説 (disjunctivism) に直結する主張である<sup>28</sup>。

他方で、アリストテレスは、「エネルゲイアにおいてある」ことが、ある場合には imperfective なアスペクトをもつことも認めている。運動変化 (キーネーシス) は「 $\phi$ している」と記述されるべき imperfective な状態であるが、エネルゲイアとしての身分をもつからである。これは、imperfective な状態そのものも一つの達成とみることができることを意味するだろう。ただし、無条件にそうではなく、そこには「建築されうるものであるというかぎりでの」( $\eta$  οἰκοδομητόν *Phys.* III 1. 201b10) という限定、一般的には「運動変化しうるものであるというかぎりでの」( $\eta$  κινήτόν, *Phys.* III 1. 201a29 etc.) という限定が付され、またそのエネルゲイアは「終極に到達していないエネルゲイア」( $\acute{\alpha}$ τελής, *Phys.* III 2. 201b31–2, *De an.* II 5. 417a16 etc.) と呼ばれる<sup>29</sup>。

しかし、繰り返すが、エネルゲイアは「現実に～している」ことを表わすための概念ではなく、ある達成を表わす概念である。

#### §4 ウーシアーのうえでの先行性とその問題

さて、以上のように確認された意味でのエネルゲイアがデュナミスに先行するという主張には、いくつかの論ずべき問題が存在する<sup>30</sup>。ここでは紙幅の関係上、アリストテレスの理解にとって重要でありかつ理論的に深刻と思われる一つの問題に焦点を当てて論じることしよう。デュナミスの基礎的性格の理解にも深く関わる問題だからである。

その問題を問ううえで、まず注目したいのは、ウーシアーのうえでの先行性についての Beere の解釈である。彼は、この意味での先行性 (実在的先行性) とは、認知的先行性でも目的因としての先行性でもないことを論じたうえで、「デュナミスにおいてあることがエネルゲイアをその本質の部分としてもつ」ことであると説明している<sup>31</sup>。私がこの解釈

<sup>27</sup> この関係は、Sellars 1956: 145 がおそらく言及する Ryle 1949: 131 ('with the exception of Aristotle') とその背景にあると思われる Ryle 1964: 102–3 を参照することによって見えてくる。

<sup>28</sup> 中畑 2023 においてこの点に簡単に論及している。

<sup>29</sup> 運動変化についてのアリストテレスの定義は、周知のように、多くの議論があるが、ここではその問題を検討することは控える。ただし、変化が未完了なエネルゲイア ( $\acute{\epsilon}$ νεργεια  $\acute{\alpha}$ τελής) であるという点をめぐる Burnyeat 2008 のいくつかのテキストの解釈に対しては、Gonzalez 2019 の批判は十分考慮されるべきである。

<sup>30</sup> ここで論じられる問題以外にも、たとえばある行為がほかでもなく  $\phi$ EO と認められるのはそれが  $\phi$ DO というデュナミスの発現として特定されるからであり、したがって  $\phi$ DO が認知的に先行するのではないか、といった問題 (Makin 2006: 183–4) などがある。

<sup>31</sup> Beere 2008: 303: 'being in capacity has the energeia as part of its essence: what it is to be in capacity F is partly a matter of what it is to be in energeia F.' 以下の議論では、おそらく Beere もそうである

(本質部分解釈と呼ぶ)に注目するのは、エネルギーの實在的先行性の意味を明確に、かつ最も強いかたちで主張するものだからであり、またこの先行性について、他の解釈よりもいくつかの点では説得性をもつからである<sup>32</sup>。しかし同時に、デュナミスとエネルギーの関係を考えるうえで、教訓的とも言える困難を顕在化させているからでもある。

まずその困難の一つは、Θ巻第六章の議論との整合性である。第六章での考察は、「エネルギーにおいてある」と「デュナミスにおいてある」が、同一の事象をめぐる異なる背反的なあり方であること、つまりφについてφEO かあるいはφDO であることが想定されていた。しかし「本質部分解釈」によれば、φDO は實在のレベルにおいてφEO をその本質的な部分として含むことになる。すると、φDO はφEO ではないのでφを達成していないが、φを達成しているという事態をその本質として含むことになる。——これは、どのようなあり方なのだろうか。デュナミスは、オントロジカルな矛盾とでも呼ばれうる事態を抱えているのだろうか。同様の困難は、エネルギーの概念についても指摘できるかもしれない。φを達成していないデュナミスにその本質の一部として含まれるべきエネルギーとは、いわば達成されていない達成とでも言うべき事態である。

ここで指摘したいのは、いま触れた困難は、アリストテレスのエネルギーの實在的先行性の主張についての一解釈の問題にとどまらないということだ。本質部分解釈は、それを極端なかたちで示しているものの、そこにはデュナミス（あるいは潜在性や力など）を基礎的實在として認める思考が引きうけるべき問題が存在する。たとえば、現代形而上学に大きな影響を与えている Armstrong が、潜在性主義を批判するのも、この論点に関係している<sup>33</sup>。彼によれば、「存在しない仮定的な事態への言及を含む特性」という潜在性 (disposition) とは、「仮定される事実や事態を凝結させたもの」であり「存在しないものを指示する」という困難を含んでいる。それゆえ、われわれはそれぞれの性質や特性を、そのような傾向性や潜在性であると考えべきではない。たとえば、「白い」という特性は、何らかの力や傾向性ではなくまさに白いというだけの性質であり（定言的特性

---

ように、この essence については一般的な意味で理解し、アリストテレスの τὸ τί ἦν εἶναι についての特定の理解を前提としない。(もし Beere がこの essence をアリストテレス的な術語としての意味で使用していたなら、興味深いかたちで問題を紛糾させる。たとえば、デュナミスにどのような意味の「本質」が認められるのかが問われる。さらに、この冒頭で言及した現代の傾向性主義と本質主義と関係では、可能性を根拠づけるべき傾向性が本質という必然性を根拠づける概念によって規定されることを示唆することにもなる。)

<sup>32</sup> たとえば、この部分の主張には可滅的なものに対する不滅なものの先行性とは異なる論理がはたらいっていることを指摘し、これを existential な依存性と理解しない点など。これは、Peramatzis 2011 によるアリストテレスの ontological priority の解釈の方向とも親近的である。

<sup>33</sup> その困難は次の指摘に巧みに表現されている: ‘The first difficulty springs from the fact that a disposition as conceived of by a Dispositionalist is like a congealed hypothetical fact or state of affairs: if this object is suitably struck, then it is caused (or there is a certain objective probability of it being caused) to shatter. It is, as it were, an inference ticket (as Ryle said), but one that exists in nature (as Ryle would hardly have allowed). That is all there is to a particular disposition. Consider, then, the critical case where the disposition is not manifested. The object still has within itself a reference to a manifestation that did not occur. It points to thing that does not exist.’ (Armstrong 1997: 79).

categorical property と呼ばれる)、傾向性と呼ばれるものは、実はこの定言的特性と自然法則などに還元したりそれによって分析したりすることが可能であるのだ、と。しかしこのように考えることは、デュナミスとしての実在性を否定することにほかならない。

こうした批判に応答するために、ネオアリストテリアンたちは、この発現されるべき特性 (manifestation 「発現特性」) が発現されていない状態、つまり発現されていない発現特性 (unmanifested manifestation) に対して、何らかの存在論的身分を与えることを試みてきた。代表的な応答は、そのような発現されるべき特性は普遍 (universal) である、というものだ<sup>34</sup>。それによれば、発現された発現特性は、その普遍が例化されたもの (instantiated universal)、発現されない発現特性は例化されていない普遍 (uninstantiated universal) である。この区別によって、発現特性は、発現される前は存在しなかったが発現されることによって突然存在を得た、という考えを拒否できる。本質部分解釈にこの考えを適用するなら、デュナミスの本質的部分を構成するエネルゲイアは、普遍としての発現特性ないしは例化されていない発現特性と解釈することになるかもしれない。

しかしこのような見解を、アリストテレスに帰すことには困難が予想される。『形而上学』Z巻において「普遍的なもの」はウーシアーの候補ではあるがその身分が疑われている。そもそもウーシアーとしての「ある」と、デュナミスとエネルゲイアという「ある」とは、別の観点からの「ある」の分類であった (E2. 1026a33–b2, Θ1. 1045b32–35)。デュナミスとエネルゲイアの対と個と普遍の対との間に架け橋をかけるためには、多くの考察が必要となるだろう。そしてこの架橋の問題は、適当な変更を加えるならば、現代の傾向性主義者ないし潜在性主義者たちにとっても、ある程度まで妥当するのではないかと思われる。ネオアリストテリアンたちの主張の基調にあるのは、可能性や必然性を現実世界の個々のもの (individuals) のあり方として説明することだからである<sup>35</sup>。そうした個別主義的立場と、個々のもののもつ傾向性や力を普遍ないしは「例化されていない普遍」という身分であると考えることとの理論的連絡は、十分に解明されているとはいまだ言いがたいように思われる。

#### IV 一つの応答の試み

以上のようにまだ検討すべき問題は多い。それでも、私は次のような世界像をアリストテレスのものとして擁護したいと考える。すなわち、デュナミスは、エネルゲイアとともに世界の基本的なあり方であり、それぞれの事象や特性が「ある」ことの一つのかたちである。デュナミスに対するエネルゲイアの先行性や何らかの優位性を認めたとしても、それはデュナミスから実在性や現実性を奪うものではない。われわれが生きているのは、

<sup>34</sup> Mumford 2004:192–195; Bird 2007: 43–50.

<sup>35</sup> Vetter 2015: 24, 125.

多種多様なデュナミスに溢れ、そのうち関連するデュナミスが相互に共同することによってそれぞれの力が発現されエネルギーにおいてある豊かな世界である。

前章の考察は、そのようにデュナミスに現実性と実在性を認めつつ、デュナミスに対するエネルギーの先行性を認めるのであれば、どのような課題を引き受けなければならないのかを、おおまかに示した。この課題に応答するためには、(i)デュナミスとエネルギーの実在性をともに保持しつつ、(ii)デュナミスに対するエネルギーの先行性と規定的性格を説明する必要がある。そしてこの課題に照らしたとき、本質部分解釈は、デュナミスとエネルギーとが背反的であるあり方であるというある種の独立性をキャンセルする考え方であるとも言えるだろう。それゆえ、両者の独立性を保持しつつそこに優先関係を認めるとすれば、一方が他方の本質の一部とするのとは異なる関係を追求する必要がある。最後に、そうした関係を表わす考え方の一つを、ラフなかたちで示す。

T3 でのエネルギーの実在的先行性は、「～のために」というかたちで記述されていた。この関係性は、アリストテレス自身がそう記述するように、デュナミスはそのエネルギーを終極目的としてそれに向かうという方向性を表わしている。エネルギーとのこの関係は、「エネルギーをその本質の部分として含む」ことよりも、いわば緩やかな関係である。すなわち、あるデュナミスがその同一性を規定するものとして本質的に含むべき事柄は、そのエネルギーという達成そのものではなく、それへと方向づけられているという関係性である（この関係性そのものは、そう言いたければデュナミスにとって本質的であると言ってもよい）。つまり「 $x$  が  $\phi$  DO である」とは、「 $x$  が  $\phi$  EO へと方向づけられている」という関係性を含んだあり方である。 $\phi$  EO は  $\phi$  DO の同一性に、このような仕方で本質的にかかわる。

この理解においては、本質部分解釈とは異なり、「 $x$  が  $\phi$  DO である」という事態そのもののうちに「 $x$  が  $\phi$  EO である」という事態が含まれるわけではない。 $\phi$  DO における  $\phi$  は  $\phi$  EO そのものないしその一部ではないのである。では、その  $\phi$  の身分は何か？ エネルギーでもデュナミスそれ自身でもない第三者だろうか？——アリストテレスの重要な論点は、その身分を考える必要はないということにある。なぜなら、「デュナミスにおいてある」と「エネルギーにおいてある」は背反的であり、 $\phi$  は  $\phi$  DO であるか  $\phi$  EO であるかのいずれかのあり方として成立するからである<sup>36</sup>。

<sup>36</sup> 説明規定における先行性の説明 (T2) には、あるデュナミスの説明規定のなかにそのエネルギーが「できる」(ないし「可能である」) ことの目的語として現われる趣旨の記述が含まれていた。すでに述べたように、その議論に登場する「建築することのできるものが建築しうる」の「建築する」は、アリストテレスの意図に従えば「エネルギーにおいて建築する」の意味に理解されなければならないからである。この点は本質部分解釈を支持することになるように見えるかもしれないが、これは説明規定のうえでの認知的なレベルでの関係であり、本質部分解釈がターゲットとするウーシアアのうえでの実在的先行性とは別に考えることができる。また最終的にはその認知的先行性も実在的先行性を根拠として成立していると理解することも可能だろう。たとえば、エネルギーの実在的先行性にもとづいて、認知的先行性はそのようなかたちで成立する等々。

もとより、デュナミスが含むのは達成としてのエネルゲイアに向かう方向的关系であるとしても、それが達成されない可能性を認めるかぎり、「発現されない発現特性」の存在論的身分などの問題が解消されたわけではない。さらなる考察が必要であろう。しかし、発現と達成の真の可能性は現に存在する力のなかにすでに係留されている——アリストテレスにとってこれが経験的世界の实在そのものの姿であることは、動かないであろう。

## 文献表

- Armstrong, D. M. 1997. *A World of States of Affairs*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Beere, Jonathan B. 2009. *Doing and Being: An Interpretation of Aristotle's Metaphysics Theta*. Oxford: Oxford University Press.
- Bird, Alexander. 2007. *Nature's Metaphysics: Laws and Properties*. Oxford: Clarendon Press.
- Bonitz, Hermann. 1870. *Index Aristotelicus*. Berlin: G. Reimer.
- Bovey, Gaétan. 2021. 'Essence, Modality, and Intrinsicity'. *Synthese* 198: 7715–37.
- Burnyeat, Myles. 2001. *A Map of Metaphysics Zeta*. Pittsburgh: Mathesis Publications.
- . 2008. 'Kinēsis vs Energeia: A Much-Read Passage in (but Not of) Aristotle's *Metaphysics*'. *Oxford Studies in Ancient Philosophy*, 219–92.
- Fine, Kit. 1994. 'Essence and Modality: The Second Philosophical Perspectives Lecture'. *Philosophical Perspectives* 8: 1–16.
- . 2005. *Modality and Tense: Philosophical Papers*. Oxford: Clarendon Press.
- Gonzalez, Francisco J. 2019. 'Being as Activity: A Defence of the Importance of *Metaphysics* 1048B18–35 for Aristotle's Ontology'. *Oxford Studies in Ancient Philosophy*, 56: 123–192.
- Makin, Stephen. 2006. *Aristotle: Metaphysics, Book θ*. Oxford: Clarendon Press.
- Marmodoro, Anna. 2009. 'Do Powers Need Powers to Make Them Powerful? From Pan-dispositionalism to Aristotle'. *History of Philosophy Quarterly* 26: 337–52.
- . 2014. *Aristotle on Perceiving Objects*. New York, NY: Oxford University Press.
- . 2017. 'Aristotelian Powers at Work: Reciprocity without Symmetry in Causation'. In *Causal Powers*, edited by Jonathan D. Jacobs, Oxford: Oxford University Press.
- . 2018. 'Potentiality in Aristotle's *Metaphysics*'. In *Handbook of Potentiality*, edited by Kristina Engelhard et al., 15–43. Dordrecht: Springer.
- Martin, C. B. 1994. 'Dispositions and Conditionals'. *The Philosophical Quarterly* 44: 1–8.
- Mumford, Stephen. 2004. *Laws in Nature*. London; New York: Routledge.
- Peramatzis, Michail M. 2011. *Priority in Aristotle's Metaphysics*. Oxford: Oxford University Press.
- Ross, W. D. 1924. *Aristotle's Metaphysics, a Revised Text with Introduction and Commentary*. Oxford: Clarendon Press.



- Ryle, Gilbert. 1949. *The Concept of Mind*. London: Hutchinson.
- . 1964. *Dilemmas: The Tarner Lectures 1953*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sellars, Wilfrid. [1956] 1963. 'Empiricism and the Philosophy of Mind'. In his *Science, Perception and Reality*. London: Routledge & K. Paul.
- Thompson, Michael. 2008. *Life and Action: Elementary Structures of Practice and Practical Thought*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- Tricot, J. 1933. *Aristotle : Métaphysique*. 2 vols. Paris: Librairie philosophique J. Vrin.
- Vetter, Barbara. 2011. 'Recent Work: Modality without Possible Worlds'. *Analysis* 71: 742–54.
- . 2015. *Potentiality: From Dispositions to Modality*. Oxford: Oxford University Press.
- . 2021. 'Essence, Potentiality, and Modality'. *Mind* 130: 833–61.
- 神崎繁 2016 「アリストテレス的自然主義の新展開 —— 「自然誌的判断」と「行為の性向」の論理形式」『理想』696: 62–76.
- 中畑正志 2023 『アリストテレスの哲学』岩波書店.

## 後記

本稿は、2022年9月11日桜美林大学町田キャンパスでおこなわれたギリシャ哲学セミナーの「主題研究 アリストテレスの形而上学」での報告を短縮したものである。報告は、「世界の豊穡性——デュナミスと本質 (Part 1)」という表題で、本稿の冒頭に触れた現代のネオアリストテリアンたちの議論を意識しつつ、アリストテレス自身にとっての本質の概念とデュナミスの概念との関係を解明するというより大きな企図のもとで、その考察の一部として構想された。しかし紙幅の制約から、本稿は、「本質」にかかわる部分の議論のすべてとデュナミスをめぐる考察のいくつかの論点を削除した短縮版となっている。発表時には不十分であったり不明確であったりした論述は可能なかぎり修正した。

質問をいただいた諸点について、「後記」でお答えするのが慣例であるが、その余裕もない。二つの点にだけ触れるなら、まずアリストテレスの倫理学との関係について、複数の方から質問をいただいた。重要な点であり、今後の考察の課題としたい。また「現実」の概念の考察がないことへの指摘があった。この指摘が何を求めているのか理解できていないが、たとえば David Lewis あるいは Alvin Plantinga, Robert M. Adams らにみられるような、可能世界のなかでこの世界が現実の世界であることについての議論を求めているのであれば、アリストテレスはそうした考察に関与しないし、むしろ日常的に理解される「現実」から考察をはじめ、現実のあり方を分析していることが哲学的に意義深い。この点については、『アリストテレスの哲学』(2023) および『中世思想研究』第 65 号でのシンポジウム報告のなかで簡単に言及するので、参照いただくとさいわいである。